Program Note

曲目解説

ジョルジュ・エネスコ（1881-1955年）
ルーマニア狂詩曲第1番Op. 11-1

本日のコンサートのオープニングは、神童と呼ばれたルーマニアの作曲家エネスコによるとにかく明るく楽しい音楽！ 冒頭はルーマニア民謡の『1レウあるから酒を飲みに行こう』のメロディが元になっていて、次いで民族舞踊曲『Hora lui Dobrică』、『Mugur(つぼみ)』、『Hora morii』、そして『ひばり』が連なって引用されています。Horaとはルーマニア語で伝統的なフォークダンスを意味します。『ひばり』は、同じくルーマニアの作曲家であるディニクのヴァイオリン曲で、ヴァイオリン・ヴィルトゥオーゾ達やジプシー楽団の持ちネタとしてよく演奏される曲です。高音域でピヨピヨと鳴きまねをアドリブでいかに速く！そしてウィットに！弾けるかを披露する楽しい曲。エネスコ自身も名ヴァイオリニストでして、この『ひばり』の録音を残しています。

バルトーク・ベラ（1881-1945年）
舞踏組曲

バルトークはハンガリーを代表するだけでなく20世紀を代表する重要な作曲家です。東欧の民族音楽を西ヨーロッパ(ドイツ・オーストリア)で発展したロマン派音楽と融合し、また、変拍子と不協和音による緊張感のあるサウンドは後世に多くの影響を与えました。本曲についてはバルトーク本人の解説があるので（他人がとやかく言うよりも確かかと)、ここに一部抜粋で引用したいと思います。

“6つの舞曲的楽章からなり、それぞれ農民音楽からのイミテーションである。そのうち一つはリトルネッロでライトモティーフのように何度か回帰する。……モデルとして用いられているのは様々な国の民謡であり、ハンガリー、ルーマニア、スロヴァキア、アラブ、ときにこれらの混合で書かれている。第1曲はアラブ風の原始的な農民音楽を思い起こさせるが、リズムは東欧の民族音楽である。第2曲はハンガリー的性質のもので、第3曲目はハンガリーとルーマニアの要素が交錯している。第4曲はアラブの都市の音楽のイミテーションが細切れに用いられている。……第5曲とフィナーレの主題については、ただただ原始的な農民音楽としか既定のしようがない。”

アントニン・ドヴォルザーク（1841-1904年）
交響曲第8番ト長調 Op. 88

本日のメインはチェコの作曲家ドヴォルザークによる交響曲第8番です。彼の作品の中でも名旋律を存分に使った傑作！

さて、国民楽派というくくりでカテゴライズされるドヴォルザークですが、実際のところの立場は微妙な位置にいました。作曲家としての初期のキャリアにおいては、メジャーデビューを果たした『モラヴィア二重唱』のように、民族的作風がブラームスやジムロック等の楽壇の重鎮から目を引いたことによります。しかし、当の本人が目指していたのはリストやワーグナーの音楽でした。初期の交響曲第3番などは完全にワーグナー風です。ただ、ブラームスの恩を受けた身でもあり、その仲間である音楽評論家のハンスリックの視線を感じざるを得ないことから、リスト=ワーグナー路線の作風を封印してしまい、ハンスリックの良しとする絶対音楽の路線を進むようになりました。でも、本人としてはいつもオペラ作曲家でありたかったようです。ブラームスの亡くなる直前になると、封印していた標題音楽である交響詩を書くようになり、そして晩年はオペラの執筆にせっせと励みます。そんな標題音楽に傾いたものだから、案の定ブラームスやハンスリックに釘を刺されたこともあったとか……。

もう一つ指摘するとしたら、ドヴォルザークはチェコの国民のための音楽に邁進したスメタナとも異なり、先述のバルトークのように民族音楽の徹底的な研究とも立場は異なり、書いたのはあくまでも軸足はドイツ・オーストリア音楽にあり、そこにボヘミアやスラブなどの民族音楽のエッセンスをトッピングしたようなアプローチだったと言えます。

さて、そういった多くの重鎮に気に入られ、絶対音楽としての交響曲作曲家として絶頂期にあった頃の1889年、交響曲第8番はお気に入りのヴィソカーの別荘で2か月ほどで一気に書き上げられました。前作の第7番がブラームス的なドイツ風であったのに対して、より自由でボヘミア風な魅力的な旋律を多々盛り込んでいます。

第1楽章は、ソナタ形式とみれますが、チェロ、ホルン、クラリネットにより第1主題の第1句が示され、次いでフルートによる軽快な第2句の二つで構成されています(この第1句を序奏とみる解釈もありますが)。そして、ロ短調に転調する第2主題の前にもう一つヴィオラとチェロによる印象的な旋律が出てきます。第2主題は、ロ短調に転じて木管により示される第1句と明るい第2句が順次登場し、ここでもドヴォルザークは2つの旋律を使います。“普通”のソナタ形式では主題は一つなのですが、メロディが滾々と湧いてくるドヴォルザークにおいては計5つもの魅力的な旋律による自由な形式で書いています。並みの作曲家では欲張って主題をたくさん並べると、取っ散らかったようになり何が言いたいのか不明瞭になるのですが、天才は違います。実は、これらの5つの旋律はどことなく似ていて、その一方でそれぞれが個性を持っているような書き方がされているのです。さらに言えば、これらを繋ぐ経過句(トランジション)も実に旋律的かつワクワク感があり、もう脱帽としか言いようがありません。学者や評論家は100年も前のハイドンらがたどり着いた交響曲のセオリーに当てはめて、これがソナタ形式の第1主題だの、やれ第2主題の転調が通常と違うだのと、とかく枠に当てはめて分析しがちですが、もはや巨匠にとってはそんな縛りはどうでもよく、とにかく美しいワクワクする心から湧き上がる音楽を書いた結果なのでしょう。

第2楽章は、牧歌的でゆったりとしたアダージョ。その流れを断ち切るかのようにカッコウを思わせる鳥の声が聞こえてきます。最後は郷愁たっぷりにボヘミアの大地を照らす夕日のように静かに終わります。

第3楽章に八分の三拍子による動きのあるスケルツォ・ワルツ風の舞踊曲を配置しました。感傷的な短調の旋律はドヴォルザーク節の最たるものと言えます。次いで、長調に転じてロマンチックなヴァイオリンで奏される第二の旋律が現れ、これまた秀逸で郷愁感あふれる名旋律。

第4楽章で、ドヴォルザークは自由な変奏形式のフィナーレを構えました。冒頭のトランペットによるファンファーレにお膳立てをしてもらい、チェロによってテーマが示されます。続いてファゴットやヴァイオリンが加わりお祭り騒ぎのように盛り上がる。フィナーレの前にいったん静まり、最初のテーマが低弦によって再現されしっとりと雄大に変奏されるあたりはこの後に書かれたチェロ協奏曲のフィナーレの手法を連想させる。

（明星大学教授・作曲家　横山真男）

＜参考文献＞ 伊東信宏:バルトーク 民謡を「発見」した辺境の作曲家／曽我大介:日本一詳しい、エネスク:ルーマニア狂詩曲Op.11の解説／クルト・ホノルカ:大作曲家シリーズ ドヴォルザーク